

身延山初期における日蓮聖人

——特に建治二年を中心として——

上 田 本 昌

一 序 言

先きに「本誌」第四十五号において、「身延入山当初の日蓮聖人」と云うテーマのもと、宗祖の入山当初に焦点を合せ、文永十一年の初夏から、同十二年、（及び建治元年）にわたる入山当初二年間について、その動静の一端を窺ってきたが、本稿では更にその後を受けて、身延在山初期（特に建治二年）における宗祖の著述を主とする生活の一端を採ってみようとするものである。

初期と云うのは、在山九か年を年時的に三年間宛三区分し、初めの三年間を初期とし、その後の三年間を中期、更に晩年の三か年を後期として扱ったものである。

初期	文永十一年甲戌	西紀一二七四	祖寿五三才	著作一五
同	○五月十七日身延到着			
	○十二月乙亥		五四才	四六
	○四月二十五日「建治」と改元			
	建治二年丙子	一二七六	五五才	三二

	中期	後期			
	同	同	同	同	同
	弘安二年己卯	四年辛巳	三年庚辰	五年壬午	同
	○二月二十九日「弘安」と改元			○九月八日身延下山、池上へ向う。十月十三日入滅。	
	一、二七八	一、二八一	一、二八〇	一、二八二	
	五七才	六〇才	五九才	六一才	
	五八才	六〇才	四〇	一一	
	三三二	二二五	四〇	一一	
	計	計	計	計	
	二九一	二九一	二九一	二九一	

在山九か年間を三期に分けてみると、一応右の如くなるが、これはあくまで便宜的に年次により三区分したものであつて、必ずしも宗祖の在山生活における区切りを意味するものではない。

尚、著作の篇数については、祖書の系年について、異論のあるものもあり、必ずしも一定しているわけではないがここでは『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺刊）の第一第二の兩卷（正篇）に依つてあげておいた。初期の三年間で九三篇、中期の三年間が最も多く一二二篇、最後の三年間が最も少なく七六篇となつてゐる。

二 建治二年（正月から三月まで）

此の年は正月から比叡山では山徒の蜂起があつたりして、叡山では喧騒のうちに年が明け、園城寺長吏に隆弁が重補された年にも當つてゐる。^① また内にあつては岡宮光長寺空存が、改宗して日春の名を賜り、中老の寂日房日家が誕生寺を築いた年でもある。^②

身延山における日蓮聖人は、入山後二度目の正月を迎え、その十一日に『清澄寺大衆中』を記されたのを始めとし

て、三十二篇に及ぶ執筆がなされている。「新春の慶賀」から始まっている右の祖書には、「真言の疏」を借用したい旨が書かれ、「今年は殊に仏法の邪正たださるべき年歟。」^③とあって、真言に対する研究が、正月早々からおこなわれようとしていたことがわかる。清澄寺は台密であったのだから真言関係の書物も備えられていたであろうが、佐渡から身延へ移られるに至って、いよいよ真言・天台の両宗折伏に、一段と力を注がれるに至ったための準備態勢とも考えられうる。すでに『撰時抄』においても△真言破▽はなされているのであるが、「今年は殊に仏法の邪正たださるべき年歟」と云う年頭の計画から推して、真言をも含め、すべての仏法について、その邪正をはっきりさせようと意気をふるい立たせていたことが推察されよう。^④

この一文から考えられることは、宗祖の身延入山は、たんなる隠棲ではなく、従来の△行動による四海帰妙▽の方針から、△文筆による皆帰妙法▽へと路線の変更を試みられたものと解することができよう。即ち、仏法の邪正をただすことによって、立正安国を期そうとする目的は、身延入山後と雖もいささかの変色をもみせていないことが知られる。

「日本国の法華経の正義を失ふて、一人もなく人の悪道に墮つる事は、(乃至)真言を正とし法華経を傍とせし程に、(乃至)此悪真言鎌倉に來りて、又日本国をほろぼさんとす。」^⑤

法華経を正義とし、その流れをくむ「仏使日蓮」としての立場から、真言亡国の折伏をおこない、『立正安国論』で予言した△他国侵逼難▽に値って、「日本国は当時の菅・対馬のようになり候べき歟」とその不便なることを思いやっているのである。又この祖書の末文には「このふみは、佐渡殿と助阿闍梨御房と虚空蔵の御前にして大衆ごとによみきかせ給へ。」とある。従って佐渡殿(日向)は、清澄に於てその大衆に、この書を読み聞かせたものと考え

られる。日向は建長五年二月の誕生で、上総(千葉県)藻原の出身である。父は藤原民部実信で、祖先は代々衣冠の人であったと伝えられ、宗祖の父貫名次郎重忠と実信とは知己の間柄であったとも云われている。^④従って宗祖は清澄方面の地理に詳しい日向を使者として、この祖書の読手としたものと考えられるのであり、これは後の『報恩抄』の場合も同様である。

次に同く新年の御供養をされた南条氏に対する答礼の祖書がある。これは十九日付で、「春のはじめの御つかひ、自他申しこめまいらせ候。さては給はるところのすずの物の事、餅七十まい・酒一筒・辛いちだ・河のり一紙袋・だいこんふたつ・やまいも七ほん等也。」^⑦と新春の祝詞と、送られて来た品々に対する御礼が述べられ、これに続いて仏法を供養する者の功德甚多を説いている。即ち法華經第八卷の「所願不虛 亦於現世 得其福報」の文、及び「當於現世得現果報」の文を引いて、最後に「檀那は又現世に大果報をまねかん事疑ひあるべからず。幸甚幸甚」と結んでいるのである。この「現世に大果報を」と云う表現は、山間僻地の身延の沢に居住しながらも、尚且つその現実の中にあつて、檀越に仏果を得せしめようと願う、「現実重視」の一端が窺えるものと云えるであろう。これは入山以前の「娑婆即寂光」や「立正安国」の思想と同様に、先ず現世に「生きる」ことの意義を把握して行こうとするものであつて、徒らに到来の浄土のみを求めようとするのではなく、これは現実重視の基盤に立った宗祖の最も尊重される行き方の一つであつたと云えよう。又後にこれは「身延靈山説」と関連を生じて来る問題でもある。

二月に入つて十七日には、『松野殿御消息』が見られる。これも柑子や其の他の送り物に対する礼状であるが、その中で法華經を持つ男女が、一切に勝れていることを薬王品を引いて述べられている。松野殿はこの時まだ宗祖に会つていなかった。「いまだ見参に入り候はぬに、何と思し食して御信用あるやらん。」とあるによつてもわかる。^⑧『松

野殿御消息」類（又は御返事・尼御前御返事を含む）は入山後に十二篇あるが、これはその第一書である。

同じく二月にはもう一書、『大井莊司入道御書』がある。「柿三本・酢一桶・葦立・土筆給ひ候了んぬ。」^⑨とあり更に天台山の竜門の滝を例に引いて、魚の竜となることの難事を挙げ、人の仏になることも又かくの如くであると、「然らば今度為_二法華經_一身を捨てて命をも奪はれたらば、無量無教劫の間の思ひ出なるべし、と思ひ切り給ふべし。」と法華經に対する信仰の決心をうながされている。「今度」と云い、「思ひ切り給ふべし」と云っている点からみてこの入道の法華信仰に対する程度が、ほぼ推測できえよう。

三月には十三日付で『阿仏房御書』がある。宝塔の御供養として「錢一貫文・白米・しなじなをくり物」が佐渡から届けられた。更に「多宝如来涌現の宝塔何事を表し給ふや」と云う質問の手紙が付いていた。これに対する解答が「法華文句」の八を引用しながら述べられている。

「末法に入て、法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。若然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經となうるものは、我身宝塔にして、我身又多宝如来なり。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり。今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり。此五大は題目の五字也。然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此より外の才覚無益なり。」^⑩

とあり、更に、「我身又三身即一の本覚の如来なり」とも述べている。法華經の題目を受持することによって、「我身」が即ち宝塔となり、三身即一の如来ともなりうるとする「本覚門」の立場を明らかにしている。阿仏房日得はこの時すでに八十八才に達していた。「我身」に仏身を得ると云うのは、先の「現世重視」とあいまって、日蓮教学の大きな特徴の一つと云えよう。

三月十八日には駿河の上野から、「芋のかしら・河のり・わさび」などの品々が届けられた。その御礼状が『南条殿御返事』である。宗祖は南条氏のことを、地名をとって「上野殿」とも呼ばれているが、数多い檀越の中でも、特に身延の宗祖に対して、折りある度に御供養の品を、多数届けていることは、与えられた祖書の数から見ても背くことができる。南条氏一族の外護が顕著であったことを物語っているものとも云えよう。

三月の下旬、二十七日には『富木尼御前御書』が記されている。「鷲目一貫竝につつひとつ」が送られて来た。在山中に富木氏へ宛て出された御消息文も十余篇にのぼっているが、それらによって常に信仰上の問題で、宗祖との間に、文通がしばしばおこなわれていたことがわかる。この御書は尼御前に対するもので、有名な「矢の走る事は弓の力、雲のゆくことは竜の力、男のしわざは女の力なり。」^⑪と云う一文で始り、「法華経の御力たのもし」いことを阿闍世王の故事になぞらえて説明している。

同じく三月に富木入道殿に宛てた『忘持経事』がある。真蹟には年月日が記されていないが、古来、日奥・日通・日諦の御書目録等には、いずれも建治二年三月三十日としてこの御書を扱っている。^⑫富木常忍が九十才で逝去した母の遺骨を持って、身延を訪れ、その帰りに所持の經典を忘れたため幸便に托して、これを送り届けたのであるが、その祈りの手紙である。これは今日の身延山納骨の起源をなすものと云われている。文中に真言・念仏・禪・律の各宗及び天台宗について、「仏陀の本意を忘失した」ものとなし、「親に背て敵に付き」たる者として、短文ながら批判を与えている。尚、「魯哀公云有二人好忘者。移宅乃忘其妻云云。孔子云又有下好忘甚於此二者上。桀紂之君乃忘其身二等云云。夫樂特尊者忘其名。此閻浮第一好忘者也。今常忍上人忘持経。」^⑬日本第一好忘之仁歟。」とあるのを見てわかる如く、機智に富だ博学の祖師の一面を窺うことができる。

次に『光日房御書』が同じく三月の著述となっている。光日房と云う人は房州天津の在住で、宗祖が幼少の頃から交際があったと考えられている。^⑭この御書は光日尼から子の弥四郎が亡くなったと云う知らせを受け、それに対する返信である。この御書の前半では、佐渡から身延への行跡が述べられ、特に身延山から生れ故郷を懐しく想う情を人間味豊かに叙している。

「本よりごせし事なれば、日本国のほろびんを助けんがために、三度いさめに御用ひなくば、山林にまじわるべきよし存ぜしゆへに、同五月十二日に鎌倉をいでぬ。」^⑮

とあって、これは身延入山の聖意を最も一般的に論ずる場合の根拠とされている一段である。「三度いさめに御用ひなくば、山林にまじわる」と云うのは、宗祖にとって当面の問題であった。だからもう一度、父母の墓参をしたいと考えたが、「又にしきをきるへんもやあらんずらん。其時、父母のはかをもみよかしと、ふかくをもうゆへにいまに生国へはいたらねども、さすが恋しくて、吹く風、立つくもまでも、東のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり。」と云う如く、当面は山林に交るが、やがて機会を得た折りには父母の墓を拜む気持でおられたことを、明記されている。又「さすがに恋しくて」と云う一段では、身延山における「人間日蓮」の赤裸々な一面を示したものと見て、味うべき一文と云えよう。^⑯入山三年にして故郷からの旧知の便りにふれ、望郷の念彷彿として湧き上る宗祖の心情は、又深く厚いものであったろう。『光日房御書』の始めには、「生国なれば安房の国はこひしかりしかど」^⑰とあり、御勘気の身となって佐渡へはなたれてみると、恐らく生きて再び「父母の墓を見る身となりがたし」と思われ、「今更らとび立つばかりくやしくて、などかかるとなりざりし時、日にも月にも海もわたり、山をもこえて父母の墓をもみ、師匠のありやうをもとひをとづれざりけんとなげかしく」思われたのであったが、今

こうして九死に一生を得、再び鎌倉の地を踏むことの出来た今日になって、「これ程の難かりし事だにもやぶれて、鎌倉へ帰り入る身なれば、又にしきをきるへんもやあらんずらん」と考え、その折りにこそ父母の墓参りも出来ようと、考え方の上に推移を見せているのである。佐渡と異り鎌倉から安房へは陸続きである。訪れようとすれば距離的にも可能なはずであった。それを敢て、ふみとどまり身延の山林に身をかくした宗祖の心情の中には、佐渡から身延へと住所は変わったが、依然「生国安房」を訪れることができない立場を、「さすがこひしくて」と云う表現によって万感をこめておられたものと推察しうるのである。身延山における宗祖が、いかに生国を恋しく想っておられたかが此の一書によっても理解できよう。

三 建治二年（閏三月から十二月まで）

建治二年は閏年であったので、「閏三月五日」付の『妙密上人御消息』があり、「青兎五頁文給ひ候畢んぬ。」とこれも礼状の形をとりながら、「上大聖人より下蚊虻に至るまで命を財とせざるはなし。」¹⁸と、生命の尊重を説き、次に法華経の題目を唱え始めた導師が、まだ現れておらぬことを明かし、「然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。」として、「何にしてか申し初めけん。上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華経の五字を、先立てねごとの様に、心にもあらず、南無妙法蓮華経と申し初て候し程に唱ふる也。」と述べ、諸経を旨とする先師が、諸経を主とし兼ねて法華経を読むも、これは真に法華経を読んだことにはならず、還って法華経を死すものであると論じている。これに対して今日蓮は「已今当の経文を深くまほり、一経の肝心たる題目を我も唱へ人にも勧む」ものであるとし、しかも「経のままに唱ふればまがれる心なし。当知。仏の御心の我等が身に入らせ給はずは唱へがたき歟」と記しているように、「仏心」の「我身」に入らせ給う「題目」なることを明らかにしている。先きに

「生命」の尊重を説き、次に「現身」に題目を唱えることにより、「仏心」をうることを述べ、更に「題目を唱ふるならば存外に功德身にあつまらせ給ふべし。」と、唱題を専ら勧奨している。尚、妙密上人については、文中に「便宜ごとの青兎」とある点から、時あるごとに宗祖のもとへ御志を奉じていたことがわかる。又「女房にも委く申し給へ」とある点から、当時、妻を持った上人であったことが知れる。

閏三月二十四日には、南条殿から「かたびら一・塩いちだ・あぶら五そう」が送られて来ており、その礼状『南条殿御返事』が記されている。その文には送られて来た衣・塩・油について、各仏典を挙げ、「御心ざしのあらわれて候事申すばかりなし」と極めて鄭重な文章を綴っている。これはこの御返事に限ったことではないが、檀越からの御供養に対しては、筆のおよぶ限り心の籠った礼言を書き記し、必ず宗義の解説や仏典の講義を付けられ、「財施」に対して「法施」をもって報いておられる。身延在山九か年間の『御消息文』は、ほとんどが、こうした型をとっており、門下に対する文書伝道の影響力は大きなものであつたらうと推察しうる。文中に大橋太郎の古事と、蒙古襲来の問題が示されている。その中で、「いかにも今は叶ふまじき世にて候へば、かかる山中にも入りぬるなり。各々も不便とは思へども、助けがたくやあらんずらん。」¹⁹⁾とある。この文の意図は、必ず近い中に蒙古の来襲があり、大きな国難に見舞れることであろう、これは最早やさけられないことと見て、「いかにも今は叶ふまじき世」と述べ、身延の山中に籠ったのもこのためであるとし、みんな不便ではあるが、恐らく助けてあげることが困難であろう、と云っているのである。すでに『安国論』で予言した「他国侵逼難」について、「経文かぎりあれば来るなり」との確信をもち、この来るべき国難は「いかにいうとも」さけることの「かなうまじき事なり」であった。

この頃の祖書には、しきりにこの「蒙古来襲」のことが記されている。先きの『妙密上人御消息』の中にも、「今一

度も二度も大蒙古国より押し寄せて、宍岐・対馬の様に、男をば折ち死し、女をば押し取り、京・鎌倉に打ち入りて、国主竝に大臣百官等を擲め取り云云²¹⁾とあり、後の『弁殿御消息』(七月)、『報恩抄』(七月)²²⁾及び『四条金吾殿御返事』(九月)²³⁾等にも、他国侵逼難が起ることを論じている。△立正安国▽を目標とされた宗祖にとって、この他国侵逼、即ち亡国の問題は何によりも大きな国難として、心根を悩ましたことであつたらう。

さて、五月に入ると、十日付で覚性房へ宛た『筭御書』一紙がある。又翌十一日付で西山殿に宛た『宝軽法重事』がある。西山殿と云うのは、宗祖直檀の一人、大内太三郎平安清のことであると云われ、富士山麓の西方に当る西山に住して、「俗とも出家とも見えず」と伝えられている。²⁴⁾「当時は勸農と申し、大宮づくりと申し、かたかた民のいとまなし」と云う多忙な時期であつたが、わざわざ「争(筭)百本・芋一駄」が送られて来た。これに対し薬王品の一節を引き、更に『法華文句』及び『文句記』の文を用いて、法華経の一偈を受持することの功德が勝れていることを明らかにしている。「宝軽法重」の法は法華経のことであり、更に「人軽法重」を説き、「人軽と申すは仏を人と申す。法重と申すは法華経なり」²⁵⁾と論を進め、一応ここでは△法仏相対▽を用いて、法の重きを述べている。しかしこの後で、「日蓮が弟子とならむ人々はやすくしりぬべし。一閻浮提の内に法華経の寿量品の釈迦仏の形像をかきつくれる堂塔いまだ候はず。いかでかあらわれさせ給はざるべき。」と述べているのでも知れる如く、△寿量品の釈迦仏▽をもって、信仰の対象とすべきことが結論づけられているのである。これは『開目抄』で云う「寿量品の仏」のことであり、△久遠本仏▽を指しているのであつて、先きの法仏相対における一般的な仏、即ち本仏の分身散体たる迹仏を指したものでないことは明らかである。末文には天台・真言の両宗についても「日輪に露のあへるがごとしとをほしめすべし。」と判じ、真蹟わずか八紙の中に獅子吼している。

六月から七月へ入ると、四条金吾殿への文通が目立つ。即ち六月二十七日付で『四条金吾殿御返事』が出され、「法華經を持ち奉るより外に遊樂はなし。現世安穩・後生善処とは是なり。」²⁶と述べ、更にその翌七月の十五日付で『四条金吾釈迦仏供養事』が著されている。四条氏が釈迦仏の木像一体を造立されたことに對し、その開眼に關して述べ、ついで仏の三身について教示されている。先ず肉・天・慧・法・仏の五眼と、法・報・応の三身について記し「この五眼三身の法門は法華經より外には全く候はず。」²⁷とし、法華經の中でも寿命品を最も大事の品となしている。更に一念三千の法門について解説し、四条氏の孝養の念厚きを讃え、「入道したい」と云う考えを「ゆめゆめあるべからぬ事なり。」と論している。要するに「寿命品の仏」こそ五眼三身具足の本仏であるから、開眼供養も又この品に限ることを明らかにしているのである。

七月十八日には一紙十九行の短文『覺性房御返事』があり、同じく二十一日には日昭につかわした『弁殿御消息』があるが、紙が不足したため、一紙に多事を書きつらねている。例えば四条氏や河辺殿等の身の上を案じたり、筑後房日朗・三位房日心・師阿闍梨日高等に、「いとまあらばいそぎ来るべし。大事の法門申すべしとかたらせ給へ」²⁸と伝言されたりしている。身延から門弟に向って、「いとまがあればいそぎ登山せよ」と呼びかけられ、「大事の法門を申し聞かすから」と云うあたり、門下の教育・激励を怠らず、更にその身を案じている点が窺れ、身は山林に交ると雖も、心中常に広く門下の動靜を探り、弘經のための精進を積まれていることがわかる。単なる隠棲でないことは、こうした祖文の端々にも現れているのである。

七月二十一日には五大部の内の一つ『報恩抄』が完成した。先きの『撰時抄』と共に、身延時代における最も大部の御書で、この年の三月十六日に清澄の道善房が遷化されたため、報恩感謝の真情をこめて、書き上げられたもの

である。この間約四か月を経ているが、日向を使者読手として遣し、墓参と本抄の読誦を命じている。本来ならば知らせを受けた直後に「自身早早と参上」すべきであったが、「心には遁世とはをもはねども、人は遁世とこそをもうらんに、ゆえもなく走り出づるならば、末へもとをらずと人をもうべし。さればいかにをもうとも、まいるべきにあらず。」^{②⑨}と云う理由から、清澄との交流が深かった日向を代参せしめる結果となった。『報恩抄送文』にも見えている通り、「又此文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ。詮なからん人人にきかせなばあしかりぬべく候。」^{③⑩}と、大事の中の大事の法門を示していることが知れる。特に一切経の肝心たる妙法五字の題目について、その功德を明かし、天台・伝教の弘通し給はざる正法、即ち \wedge 三大秘法 \vee を示している。これは日蓮教学の根幹をなす最大事の法門であつて、みだりに「詮なからん人々に」聞かすべきものではない \wedge 秘法 \vee と云うべきものである。開目・本尊の両抄に於て究明された宗義の根本を、本抄において総合的に集約され、 \wedge 大事の大事 \vee として説示されたものと解しえよう。

「一切衆生の盲目をひらける功德あり。」との一文がこの事情を物語っているものとも云えるであらう。本抄上下二巻は、身延期における大作であり、宗祖がもつとも心根を傾けた著作の一つであると云える。尚末文に「自_レ甲州波木井郷_ニ蓑步_ニ嶽_ニ奉_ニ送_ニ安房_ニ国東条郡清澄山淨願房義城房_本」^{③⑪}とある。「蓑歩」と云うのは、『身延山史』によると、「往古はこの地巨摩郡波木井郷に属して、飯野・御牧と共に南部六郎実長の領邑なり。身延はもと「蓑夫」と書す。」^{③⑫}とあり、更に『身延町誌』にも「身延」の地名に関する詳細が記されているが、この「蓑夫」をここでは「蓑歩」と書き表されたものであつて、宗祖入山以後に「蓑夫」が「身延」に変えられていったものと考えられる。

この『報恩抄送文』のあとに、『昭和定本』では、『西山殿御返事』を配しているが、お書きになった月日は不明である。但し「青兎五貫文給ひ候畢んぬ。夫れ雪至て白ければ、染にそめられず。云云」とあるにより、雪の頃の執

筆かとも考えられよう。

八月三日には『曾谷殿御返事』が記されてをり、境智の二法が合して即身成仏するの理を説き、八月十日には『道妙禪門御書』が書され、「御親父祈禱之事承はり候」と祈禱に関する一書がある。又九月六日には『四条金吾殿御返事』が記されている。宗祖がいかに金吾氏の身の上を案じていたが、この一書によって理解されよう。「殿いかなる事にもあわせ給ふならば、ひとえに日蓮がいのちを天の断せ給ふなるべし。」^④日蓮と殿とは同体であると云う觀念は、檀徒にとって此の上ない信仰上の励ましであったにちがいない。

九月十五日に南条氏から「いゝの芋（里芋）一駄」が送られて来たのに対し『九郎太郎殿御返事』がしたためられその中に身延の状況が次の通り述べられている。

「此身延の沢と申す処は甲斐の国波木井の郷の内の深山也。西には七面のかれと申す嶽あり。東は天子のたけ、南は鷹取のたけ、北は身延のたけ。四山の中に深き谷あり。はこのそこのごとし。峯にははかう（巴峽）の猿の音かまびすし。谷にはたいかい（碌碓）の石多し。」^⑤

当時の身延の地理、及び宗祖の生活環境を知る上での貴重な文献の一つと云えよう。

次に宛名及び月日はさだかでないが、「白米一俵・けいもひとたわら・ほふのりひとかご」を供養されたのに対する礼状『事理供養御書』がある。秋の収穫を得て宗祖のもとへ届けられたもので、富士山麓か又は千葉方面の檀越が施主であろう。文中に「いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。」^⑥と生命尊重を記し、その「命を仏にまいらせて仏になり候なり」と、不惜身命の信を説いている。又、「食ともし」くして「誑経の音も絶へぬべし」と云う状態であった。「しかるにたまたまの御とぶらいただ事にはあらず。教主釈尊の御すすめか」と悦んでいる。これに

より西谷の食生活の一端が窺えよう。

かくして建治二年も十二月を迎えるが、その月の九日、「菟目一結・白米一駄・白小袖一」が松野殿から送られて来た。『御返事』には身延の地形が述べられ、「訪ふ人も希なるに加様に度度音信せさせ給ふ事、不思議の中の不思議也³⁶」とある。この頃の身延は訪れる人も少ない中に、松野氏だけがしばしば音信を寄せていたことがわかる。

同月十三日には富木殿から「鶯目五貫文」が送られて来ているが、その礼状たる『道場神守護事』にも、「衣食乏少之間説經之声難³⁷統 談義之動可³⁷廢」とあり、先きの『事理供養御書』にも見られる通り、年の瀬を控えての窮乏生活であつたことがわかる。恐らくは六老僧を始めとする門弟らは、各地に転じて布教に専念していた為に、訪れる人も少なく、孤独の中に、窮乏の日々をすごされていたものの如くである。

この他には、いよいよ年の暮も迫るに及んで、南条平七郎殿から「法華経御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・踏^{いんげん}氏^{いんげん}一駄」が送られて来ている。又建治二年の御書として扱われているものに、『さだしげ殿御返事』（真蹟一紙）と、『松野殿御消息』及び『破良観等御書』がある。この中の光日尼へ宛たものとされている『破良観等御書』には、法華経と大日経との勝劣を論じ、更に破折によって生じた受難に言及している。

建治二年もこうして暮れていった。宗祖の在山中における文筆と教化の生活の一面を、祖書を中心として、探つてみたが、数々の消息文を通して、その奥に流れている宗祖の思想・信仰、特に檀越に与えられた人間味豊かな、心情の籠った文章には、今尚生きた宗祖の息吹きを感じさせられる。

「生きた言葉」として、現代に語りかけている祖文を、深く味ってみるべきであらう。今回は紙数の関係で、建治二年の祖書のみ留ったが、又次の機会を期したい。

[註]

- ① 仏教大年表(望月仏教大辞典第六卷) 二七七頁
- ② 本化別頭仏祖統紀(通別一覽志) 六七頁
- ③ 昭和定本日蓮聖人遺文(第二卷) 一、一三三頁
- ④ またこの頃、真言宗との法論が、近々にあるらしいとの情報もあったようである。(『報恩抄』の送文に見られる。一、二五〇頁)
- ⑤ 清澄寺大衆中 一、一三三頁
- ⑥ 本化別頭仏祖統紀(巻第十一) 二一八頁
- ⑦ 南条殿御返事 一、二七頁
- ⑧ 松野殿御消息 一、一四一頁
- ⑨ 大井莊司入道御書 一、一四三頁
- ⑩ 阿仏房御書 一、一四四頁
- ⑪ 富木尼御前御書 一、一四七頁
- ⑫ 御書新目録(日奥編)、御書目次(水戸檀林日諦編)、境妙庵目録(玉沢日通編)等参照
- ⑬ 忘持経事 一、一五〇頁
- ⑭ 日蓮聖人御遺文講義(第十二巻) 一、一五〇頁
- ⑮ 光日房御書 一、一五五頁
- ⑯ 『棲神』第四十一号の拙論「身延山における日蓮聖人の人間的一面」参照
- ⑰ 光日房御書 一、一五二頁
- ⑱ 妙密上人御消息 一、一六二頁
- ⑲ 南条殿御返事 一、一七六頁
- ⑳ 妙密上人御消息 一、一六八頁
- ㉑ 弁殿御消息 一、一九一頁
- ㉒ 報恩抄 一、二三六頁
- ㉓ 四条金吾殿御返事 一、二五九頁
- ㉔ 御書抄(巻十七) 六二頁
- ㉕ 宝輦法重事 一、一七九頁
- ㉖ 四条金吾殿御返事 一、一八一頁
- ㉗ 四条金吾釈迦仏供養事 一、一八三頁

- ②⑧ 弁殿御消息
- ②⑨ 報恩抄
- ③① 報恩抄送文
- ③② 身延山史
- ③③ 身延町史
- ③④ 四条金吾殿御返事
- ③⑤ 九郎太郎殿御返事
- ③⑥ 事理供養御書
- ③⑦ 松野殿御返事
- ③⑧ 道場神守護事

一、一九一頁
 一、二四〇頁
 一、二五一頁
 一一頁
 八〇頁
 一、二五八頁
 一、二六〇頁
 一、二六一頁
 一、二六四頁
 一、二七四頁